

## 自然言語における動的性質の分析

天本 貴之 (Amamoto Takayuki)

慶應義塾大学大学院文学研究科博士後期課程

---

本発表では自然言語の動的性質を検討する。特に、意味が本質的に動的であるとする動的意味論(dynamic semantics)の立場を再考する。伝統的な形式意味論では、文の意味はその文がもつ真理条件であるとする真理条件的意味論が主流であり、意味の概念は静的にとらえられている。これに対して、文の意味は真理条件にあるのではなく、解釈者がもつ情報状態を更新することにあるという見解をもつ動的意味論という立場が存在する。この立場は、語用論の形式化という目的のもと、談話や会話レベルの現象に意味論的な解析手法をもたらしている。

しかし近年、Lewis, K や Dekker, P といった、意味論を動的にすることに反対する論者が増加傾向にある。彼女らの見解によれば、たしかに自然言語には情報を更新するためのダイナミックなシステムが必要だが、それは必ずしも意味論で実行される必要はない。たとえ談話レベルの照応といったダイナミックな現象があるとしても、それらは語用論的にも説明でき、さらにいえば、動的意味論のコンセプトを実行しているのは語用論の方であると考えるのが自然である、という。

この点にかんして、Rothschild & Yalcin[1]は自然言語の動的性質を(1) (文の) 構成的な意味論的値にかんする性質、(2) 会話システムにおける性質、そして(3) 談話における性質の三つに細分化し、それぞれを異なるレベルで独立に論じることができると主張している。したがって Rothschild & Yalcin の分析に基づけば、意味論を静的にしながら談話レベルのダイナミックな現象を語用論的に扱おうとする Lewis らの見解は無視できないものであり、動的意味論にとって脅威となる。

そこで本発表は次の二つを目的とする。第一に、Rothschild & Yalcin の動的性質の分析が、動的意味論を退けるのに決定的な影響を与えるかどうかを明らかにする。静的アプローチが動的アプローチと等しい説明力を持つことが可能だという程度であれば、動的意味論を放逐するに十分ではないと本発表では主張したい。第二に、上記の内容をふまえ、どの性質を重視するかという点で動的フレームワークの再編を試みる。これらの結果が、自然言語における動的フレームワークの統一につながると考える。

[1] Rothschild, D. & Yalcin, S. (2016). Three notions of dynamicness in language. *Linguistics and Philosophy* 39, 333–355.